

日本語教育能力検定試験について

國 本 さおり

0. はじめに

実際の講義では日本語教育能力検定試験に関する話をしたあと、残りを平成5年度日本語教育能力検定試験の試験問題から3題を抜粋し、受講生の方に「日本語」について考えてもらう時間とした。問題を解くというのが目的ではなく、声に出したりテープを聞いたりしながら、ふだんあまり見ない角度から日本語について考えることで、日本語をとらえ直すきっかけになればと思ったからである。無意識に使っている日本語を客観的にとらえ直すことは外国語として「日本語」をとらえる態度にほかならず、それは日本語教育の前提でもある。そのためかなり重点を置いたが、講義録のための文章化にあたっては後半部分を省いたことをお断りしておきたい。

1. 日本語教育能力検定試験ができるまで

日本教育能力検定試験（以下検定試験）が実施されるまでの経緯を簡単に述べる。日本語教員に関連する動きは、昭和58(1983)年8月、21世紀への留学生政策懇談会が「21世紀への留学生政策に関する提言」の中で、留学生の受け入れを増やし、21世紀の初めにはフランス並みの10万人台を目指すべきであると具体的な数字をあげたことから始まる。当時の留学生数は12,200人、日本語教員は2,200人だった。

これを受けて昭和60(1985)5月、日本語教育施策の推進に関する調査研究会の出した報告「日本語教員の養成について」では、21世紀に現在の約10倍にあたる留学生を受け入れるためには、それに見合う日本語教員も必要であると考えられ、その数は約25,000人（西暦2000年）と試算された。同報告では、留学生の増加にともない必要となる日本語教員も増加すると予想されること、また海外における日本語学習者が増加していることを挙げて、日本語教員養成機関の整備・充実を図る必要があるとした。また日本語教員養成のための標準的な教育内容等について例示し、さらに日本語教員検定制度を設け、日本語教員の資質・能力の向上に資する必要性についても提言している。これは日本語教員の数の問題だけではなく、質やレベルが問われてきたことによる動きであると言える。

そして昭和62(1987)年4月、日本語教員検定制度に関する調査研究会が提言に基いて検討した内容を「日本語教員検定制度について」として報告した。そこには基本的考え方として、「日本語教員には、国際的感覚と幅広い教養、豊かな人間性、日本語教育に対する自覚と情熱、日本語教育に関する専門的知識・能力等の資質・能力が要求されるが、日本語教員検定はこれらの資質・能力のすべてについて審査するものではなく、日本語教育に関する知識・能力が日本語教育の専門家として必要とされる水準に達しているかどうか、その到達度を試験の方法により審査し、証明するものとして実施することとする」とある。また資格試験ではないともし、ほかに試験のレベル、受験資格、試験の内容・方法、出題範囲など具体的方策を示している。それらを踏まえて昭和63(1988)年に第1回日本語教育能力検定試験が実施された。以来年1回1月の最終日曜日に行なわれており、平成6年度検定試験（平成7年1月29日実施）で8回目を数える。

2. 日本語教育能力検定試験の概要

平成5年度日本語教育能力検定試験実施要項（抜粋）

〈趣旨〉

外国人に日本語を教える日本語教員の専門性の確立と日本語教育の水準の向上に資するため、日本語教員となるために学習している者、日本語教員として教育に携わっている者等を対象として、その知識および能力が日本語教育の専門家として必要とされる水準に達しているかどうかを審査し、これを証明することを目的として、日本語教育能力検定試験を実施する。

〈試験の内容と水準〉

試験の内容と水準は、日本語教員として最低限必要な専門的知識・能力を習得させることを目的とする大学の学部における日本語教員養成副専攻課程と同等程度とする。

〈試験の出題範囲〉

出題範囲は別記のとおりとする。ただし、全範囲にわたって出題されるとは限らない。

〈試験時間〉

筆記試験Ⅰ 140分

聴解試験 30分

筆記試験Ⅱ 100分

趣旨にうたわれているように試験の目的は「日本語教育の専門家」としての知識・能力の水準を測ることにあり、検定試験の可否と日本語教員になること（または日本語教員であること）は関係がない。それは試験の対象に「日本語教員となるために学習している者」だけでなく、「日本語教員として教育に携わっている者」として現役の日本語教員もあげられていることからわかりいただけると思う。

試験の内容と水準については、副専攻課程では日本語に関する科目を26単位取得しなければならず、同じ教育内容を一般の日本語教員養成機関で行なう場合は、420時間が必要とされる。そのため日本語教員養成を目的とする学校や通信教育の講座ではほとんどが、420時間のカリキュラムを組んでいる。

試験の出題範囲は非常に広い範囲に渡っているが、音声、語彙、文法、教授法などのように毎回必ず出題され割合も大きい領域と、出題される割合の少ない領域がある。全体としてそれほど深い知識は必要とされていないと言える。試験問題は平成3年度検定試験より公表され、凡人社から発行されているので、大体の傾向を知ることができる。

ほかには、受験資格は20歳以上の者であること。試験会場は現在のところ東京、大阪、福岡の3カ所であること。出願書類は9月末頃から主要書店で購入でき、申し込み期間は10月中旬から11月初旬までとなること。試験は筆記試験Ⅱの1題を除きマークシート方式で解答するようになっていること、がある。

なお検定試験の可否のラインがどのくらいなのか、また正解および配点についても公表されていない。合格率は約18～20％となっている。

3. 日本語教育能力検定試験の位置づけ

検定試験に合格したからといって日本語教員になれることは限らないし、ベテランの日本語教

日本語教育能力検定試験について

出題範囲

| 領 域 | 主 要 項 目 | 領 域 | 主 要 項 目 |
|--------------------------|---|-------------------|---|
| 1-1 日本語の構造に関する体系的、具体的な知識 | | | |
| 日本語学概論 | 1. 世界の中の日本語 2. 日本語の特質 音声、語彙・意味、文法・文体、文字・表記、言語生活等について (1) 対照言語学的に見た特質 (2) 社会言語学的に見た特質 | 日本語史 | 3. 第二言語としての言語生活 (1) 母語による言語生活との比較 (2) バイリンガリズム・マルチリンガリズム 1. 古代語と近・現代語 2. 近・現代語の成立 (1) 近代語 (2) 現代語 |
| 音声 | 1. 音声器官と発音 名称と機能 調音法、調音点、調音者 2. 単音レベル 音素と異音 異音の分布 音素記号と音声記号 母音の分類 半母音 子音の分類 五十音図とその拡大表 3. 音節レベル 音節構造 音節（拍） 特殊音節 4. 単語レベル 母音の無声化、その他環境による音声変化 アクセントの感覚・規則・表記 縮約形など、話し言葉の語形 5. 文レベル・談話レベル イントネーション プロミネンス（卓立） ポーズ 速さ | 2 日本事情（古典と文芸を含む。） | 1. 日本の歴史・地理 (1) 日本の歴史 (2) 日本の地理 2. 現代日本事情 (1) 現代日本の政治・社会 (2) 現代日本の文化 |
| 語彙・意味 語彙 | 1. 基本語彙と基礎語彙 2. 語彙の類別 使用者別・場面別・語種別・言語活動別・分野別・音声的特徴別・文法的機能別等 3. 語構成 4. 辞書 1. 語の意味 2. 句の意味 3. 文の意味 4. 文章・談話の意味 | 3 言語学的知識・能力 | |
| 意味 | 1. 語・文節のレベル (1) 品詞 名詞、動詞、形容詞、副詞、(助詞、助動詞、複合助辞、その他) (2) 活用などの変化形式とその用法 名詞、動詞、形容詞 (3) 文節の構成 2. 文のレベル (1) 文の種類 (2) 文の成分 (3) 単文の構成 (4) 複文の構成 (5) 構文と意味 3. 文章・談話のレベル (1) 旧情報、新情報等 (2) 話者の視点 (3) 話法 (4) 文章・談話における文の選択 4. 言語生活と文体 (1) 敬体と常体 (2) 書き言葉、話し言葉 (3) 男性語、女性語 (4) 地域語と共通語 (5) フォーマル・インフォーマル | 言語学概論 | 1. 言語の本質 2. 言語能力と言語運用 3. 言語の普遍性と個性（類型論を含む。） 4. 言語学と関連領域 5. 世界の言語 6. 各論 (1) 文法論 (2) 意味論 (3) 音韻論 (4) 語彙論 (5) 文字・表記論 |
| 文法・文体 | 1. 語・文節のレベル (1) 品詞 名詞、動詞、形容詞、副詞、(助詞、助動詞、複合助辞、その他) (2) 活用などの変化形式とその用法 名詞、動詞、形容詞 (3) 文節の構成 2. 文のレベル (1) 文の種類 (2) 文の成分 (3) 単文の構成 (4) 複文の構成 (5) 構文と意味 3. 文章・談話のレベル (1) 旧情報、新情報等 (2) 話者の視点 (3) 話法 (4) 文章・談話における文の選択 4. 言語生活と文体 (1) 敬体と常体 (2) 書き言葉、話し言葉 (3) 男性語、女性語 (4) 地域語と共通語 (5) フォーマル・インフォーマル | 社会言語学 | 1. 言語変種 (1) 階層言語 (2) 地域言語 (3) 言語変化 2. 場面と言語 (1) 敬語と非敬語 (2) 男性語、女性語 (3) フォーマル、インフォーマル 3. 媒体 (1) 手紙、電話、書き言葉と話し言葉 (2) マス・コミュニケーション、パーソナル・コミュニケーション 4. 言語使用・言語生活 5. 言語政策・言語教育 |
| 文字・表記 | 1. 文字・記号の種類 2. 文字、記号の使い方 (1) 漢字仮名まじり文 (2) 仮名遣い (3) 送り仮名 (4) 外来語の表記 (5) 漢字の書き方 (6) 漢字の読み方 (7) 記号の使い方 (8) 辞書の使い方 3. 文字表記の選択 4. 文章の表記 | 対照言語学 | 1. 比較言語学・歴史言語学と対照言語学 2. 言語体系と運用の対照 音声、語彙・意味、文法・文体、文字・表記、言語生活等について (1) 類似点と相違点 (2) 母語の干渉、誤用分析 3. 言語行動・言語生活の対照 |
| 1-2 その他日本語に関する知識 | | 日本語学史・日本語教育史 | 1. 日本語学史 (1) 明治以前の研究の概略 (2) 明治以後の研究の概略 2. 日本語教育史 (1) 戦前の教育史の概略 (2) 戦後の教育史 (3) 日本語教育と国語教育 |
| 1-2 その他日本語に関する知識 | | 4 日本語の教授に関する知識・能力 | |
| 言語生活 | 1. コミュニケーション (1) パーソナル・コミュニケーションの場面、条件、様式、媒体等 (2) マス・コミュニケーションの形態、媒体等 2. 技能 (1) 聞く (2) 話す (3) 読む (4) 書く | 教授法 | 1. 日本語教育の目的・方法 2. 言語教育と言語研究の関係 (心理言語学的観点を含む。) 3. 外国語教授法 4. 日本語教育の基本語彙・基本漢字・基本文型 5. 習得過程 6. 指導手順・カリキュラム作成 7. 練習指導技術 8. 技能別指導法 9. 対象別・母語別指導法 10. 能力差・クラスサイズに対応する教授法 11. 学習段階による指導法 12. 添削技術 |
| | | 教育教材・教具論 | 1. 教材教具概論 (1) 目的 (2) 期間 (3) 場面 (4) レディネス (5) カリキュラム 2. 教材の具体的使用法 (1) 教材 (2) 教育条件 (3) 環境 3. 教育機器・教具 |
| | | 評価法 | 1. 評価の対象 2. 評価の目的と効果 3. テストの作り方 4. 評価の方法 5. 結果の分析 |
| | | 実習 | 1. コース・デザイン 2. 教案作成と教材選定 (1) 教壇実習に備えての教案作成 (2) 具体的指導案の作成 |

員の中にも検定試験を受けていない方もいる。ただ、「日本語教育施設の運営に関する基準」の「教員の資格」のひとつに「日本語教育能力検定試験に合格した者」があげられているため、一般の日本語教育機関などで日本語教員を募集する際に応募条件になっている場合がある。また日本語教育能力に関する試験が検定試験しかないことから、資格試験に準じた扱いとなってきた。

では、日本語を教えたい、日本語教員になりたいと思っている人は検定試験に合格するべきなのかというと、そうは言えない。日本語を教えると言っても様々な関わり方が考えられる。まず、ボランティアとして教えるのか、職業として教えるのか、という違い。海外で教えるのか、日本語学校で教えるのか、大学で教えるのか、会社で教えるのかなど、どこで教えたいのかということ。確かに、先にも述べたとおり日本語学校で就職するためには検定試験合格が近道である。しかし目的によっては、大学で日本語教員養成課程を専攻した方がよい場合もあるし、日本語の基礎的知識を身に付けていればよい場合も考えられる。

日本語を教えるために検定試験が必要か否かは個人で判断するしかない。どちらにしても、外国人の目で日本語をとらえられるようになること、「日本語」とは何なのかを知ることが、日本語を教えるための第一歩であることに変わりはない。

4. 学習方法 ― ひとつの目安として ―

検定試験のための勉強と日本語を教えるための勉強とは切り離して考えるべきだが、日本語を客観的にとらえる態度は両者に共通である。

学習方法として、一つは独学で各分野の入門にあたる本を読むというのがある。またそれでは心もとないという方には、日本語教員養成講座に通い、現職の日本語教員の実体験に基づいた講義を受けるのもためになる。三つめとして通信教育の講座を受講するのも、暇な時間を利用し自分のペースで進むことができるのでよいと思う。試験問題の傾向を知るには平成3年度から公表され、発売もされている実際の試験問題にあたるとよい。また試験対策用の問題集も出版されているので、音声・文法など分野別に問題を解いてみることもできる。マークシートや時間配分に慣れるために、出版社のアルク主催の「日本語教育能力検定試験模擬試験」を受けてみるのも一つの方法である。毎年10月末にあり、札幌で受けられる。

毎回出題の割合が大きい「音声、文法、教授法」などから、自信の持てる分野を作ることはぜひお進めしたい。また1日がかりの試験なので、体力・気力も必要である。

5. 日本語を知るために

以下に検定試験に関する本と日本語を知るために役に立つ本をいくつかご紹介する。

日本語に関する本は、量は限られるが、札幌の旭屋書店、紀伊國屋書店、丸善に置かれている。雑誌はそのほかの書店でも手に入れることができる。また、凡人社で出している『日本語教材リスト』（無料）は手元にあると便利。2,000点以上の日本語に関連する書籍が掲載されている。

財) 海外技術者研修協会編 (1990) 『新日本語の基礎 I』 スリーエーネットワーク

日本語の教科書。日本語の文型および学習者が学ぶ順序がわかる。

金田一春彦 (1988) 『日本語 (新版) 上・下』 岩波新書 (赤 2・3)

鈴木 孝夫 (1990) 『日本語と外国語』 岩波新書 (赤 101)

水谷 修 (1979) 『話しことばと日本人―日本語の生態』 創拓社

佐々木瑞枝（1994）『外国語としての日本語』講談社現代新書（1200）

以上の4点は日本語を知るために有効で手に入れやすい。

丸山 敬介（1994）『教えるためのことばの整理 1・2』京都日本語教育センター

日本語について考え、整理しながら学習することができる。

金田一春彦監修（1981）『明解アクセント辞典第2版』三省堂

日本語のアクセントを知るために。

日本語教育学会編（1990）『日本語教育ハンドブック』大修館書店

具体的な指導上の留意点ほか、記述は日本語全般にわたる。

財）日本国際教育協会『平成5年度日本語教育能力検定試験問題』凡人社

実際の試験問題が公表されている。聴解試験のカセットテープ付き。

アルク日本語出版編集部編からは日本語教育関連の雑誌が多数発行されている。

『月刊日本語』

日本語教育に関する雑誌。検定試験模擬試験の情報は9月号くらいに掲載。

『新・日本語を教えるためのカタログ』（1995.1）

教材の紹介など。

『日本語教師読本 ― プロになるための最新情報 ―』（1994.10）

日本語教師に関する情報、養成講座の情報など。

『試験に合格するための本』

検定試験対策。

『検定試験直前対策』

検定試験対策。模擬試験。